

TOKYO PAPER

ト キ ョ ー ペ ー パ ー

for Culture

フォー カルチャー

今年7月に創刊した『TOKYO PAPER for Culture』。東京文化発信プロジェクト（ブンプロ）から発行されているこのフリーペーパーは、“東京の文化を知る、深める、高める”をモットーに、楽しく文化を研究することをコンセプトにしています。フリーペーパーそのものを“文化研究所”とし、その文化研究員である私たちは、人、モノ、場所など、日々東京の隅々を観察、取材しています。そこから浮かび上がってくる、東京の振る舞い。それはきっと今を生きる私たちのヒントになると信じて。

The “TOKYO PAPER for Culture,” a free newspaper from the Tokyo Culture Creation Project, aims to know, deepen, and enhance the culture of Tokyo through fun, culture-oriented research projects. First published in July 2013, the paper serves as a “cultural research institute” where we cultural researchers turn Tokyo inside out to spotlight the people, things, and places that make this place so amazing—the things that make Tokyo come to life. Here's to an exciting, fulfilling journey!

第二号／002





これから先の文化に想いを寄せて

Karoku Yanagiya

Lucas Badtke-Berkow

Yuko Nagayama

東京って？文化って？見かたも見えかたも、多種多様。まだまだこの議論は尽きません。そこで創刊号に続き、各分野で活躍される表現者の方を“客員研究員”としてお招きし、東京の輪郭を文化の視点から自由にクロストーク。柳家花緑さん（落語家）、ルーカス・B.B.さん（クリエイティブディレクター）、永山祐子さん（建築家）の登場です！

Following up on our debut issue, we have once again invited creative minds from various fields to serve as “guest researchers” in exploring the contours of Tokyo from a cultural perspective: rakugo performer Karoku Yanagiya, creative director Lucas Badtke-Berkow, and architect Yuko Nagayama.

台東区谷中。情緒溢れるまちであり、ブンプロとも縁の深いまちです。この日が全員初対面となったお三方は、そんな谷中をちょっと散策。そして、まちのランドマーク、カヤバ珈琲で議論は始まりました。

永山祐子（以下、永山）：東京はなんでも溢れていて、ある意味で飽和状態ですよ。その中でただ真新しいものを作り出すことよりも、古いもの、埋もれていたものから、面白いと思えるものを見つけて、それを持ち寄って編集をし直していく。そういうものづくりをしていければ、今の時代、無駄がない気がします。それはこれから先の未来に向けて、新しい文化を作る上でも、大切な視点だと思っています。長く根付いてきたものや場所の特性に、今を生きる自分たちの感覚を重ね合わせてみたとき、どんな科学反応を起こすことができるのか。**柳家花緑（以下、花緑）**：僕もそう思います。あと僕、文化は“作業”では作れないと思っているんです。永山さんの言うように古いもの、例えば昭和の建物には、笹や富士山など、いろんな柄の入ったすりガラスの窓がありましたよね。すりガラスの木枠の細工もすごく繊細で美しくて。そういう手間暇かけたものが、昔は暮らしのいろんな場所にあったなと思うんです。**永山**：そういう場所には、空間の質というものが出来上がっていて、いろんな可能性に溢れているんですよ。**花緑**：そうなんです。でも今は機能性が重視される時代になったでしょう。その分どこかこう、日常のいろんなことが“作

業”になりがちな気がしています。時には食べることや寝ることすら作業になっている人もいます。とにかく“楽しむ”ということが減ってきている気がします。**ルーカス・B.B.（以下、ルーカス）**：お二人の言うように文化はすぐには作れないもの。時間をかけてじっくり作られていくものですよね。アメリカ人の僕は、20代までアメリカに住んでいましたが、実は欧州文化がアメリカに流れてきて、まだ数百年です。日本はそれよりも長い時間をかけて培ってきた文化があるし、そういう中で今に残されてきたものには絶対に理由があると思うんです。その理由や原点を、今を生きる私たちがどう解釈したら良いのか？その解釈を提案することが、僕の編集者という仕事だと思っているんです。やっぱり自分自身が大事だと思うものを、ちゃんと伝えて残していきたい。文化がなければ、育たなければ、花緑さんが言ったように、どんな行為もすごく作業っぽくなってしまいます。**花緑**：ルーカスさんは日本に暮らして何年ですか？**ルーカス**：僕にとって日本は初海外の地なんです。うどんがすごく気に入って（笑）、そのまま20年、日本にいます。**花緑**：確かに20年前のアメリカではうどんを食べられる場所はありませんでした（笑）。僕は日常の行為が“作業”にならないために実践していることがあるんですよ。僕は正しい判断の上に、楽しい判断というものもあると思っているんです。それは他人が何とも思わないことを、自分がどれだけ楽しめるか、面白がれるのか？ということ。つまり日常の中で面白のレッテルを貼っていくんです。例えば毎日の朝食。コースターを置いて

Nagayama: Tokyo is overflowing with so much of everything that it's really kind of saturated. In times like these, rather than only making things that are completely new, I think it might be less wasteful to create by sifting through the old and overlooked, discovering what seems interesting, and rearranging it.
Karoku: I think you're right. I also think culture is something that can't be created through work. You mentioned old things. Take frosted glass, for example. Windows in buildings from the Showa period incorporate all sorts of designs like bamboo grass and Mt. Fuji, and the detailing on the wooden frames is really exquisite. The everyday lives of people in the old days offer so many examples of this kind of painstaking attention to detail.
Nagayama: Places like that have a spatial quality that opens up all sorts of possibilities when looked at today.
Karoku: You're absolutely right. Today, though, it seems like everything is made with such an emphasis on functionality that it injects a sense of work into all aspects of the everyday.
Badtke-Berkow: I'm an American and lived in the United States into my 20s, but European culture actually only

On Culture Yet to Come

たり、器に合わせたランチョンマットを敷いたり、妻と一緒に料理の演出を考えるのがすごく好き。

永山：毎日奥さん偉いですね（笑）。

花緑：ですよ（笑）。でも妻はこれをプレッシャーに感じず、僕と一緒に遊んでくれている人なんです。人は遊びだと思って楽しんでいると、“作業”には感じません。そういう遊びという視点で世の中を見ると、いろんなものが目に留まります。これは日常の中の様々な行為が“作業”にはならず済む、ひとつの手段ではないかと思っています。

永山：行為と言えば、私は建築とは行為と時間を作るものだと思います。「この建築のなかで人は何を想いながら、どういう風な時間を過ごすのだろう、誰と一緒にいるのだろう」。私は設計するとき考えてます。例えばここ、カヤバ珈琲をリノベーションするときには、1階の古い天井を一旦落として、そこに黒い透けるガラスを全面に張りました。そのガラスが鏡になって、店内や窓外の風景が映り込むようにしたんです。お客さんはその天井の下にあるテーブルで、コーヒーを飲む。するとコーヒーは黒い液体なので、表面にその風景が映像のように映り込むんです。それを眺めながらふっと顔を上げると、窓の外は明るい。そんな喫茶店独特の時間の流れが、自分を内省するきっかけにも繋がっていく。小さな現象ですが、そういう時間を過ごしてもらいたいとリノベーションしました。

花緑：コーヒーの表面に映る景色についてまで考えているという話は、今日初めて聞きました。すごいなあ……！

永山：建築を考えると、コーヒーカップのような手のひらサイズの出来事から出発する発想をととても大切にしています。と同時にこの建築が東京という都市のなかでどういう意味を持つのか？ ということを俯瞰的に捉えることも必要です。その両方の感覚を持ちながら設計することが、結果として人の行為や日常の暮らしに寄り添える建築が作り出せると思います。

キーワードは、ヒューマンスケール

ルーカス：僕たちが作っている雑誌『PAPERSKY』では、『ツール・ド・ニッポン』という企画を定期的に行っているんです。これは自分たちが暮らす日本を知るために、もっと旅に出かけて欲しいという思いから始めましたこの企画は、“自転車、山、本、食、日本”という5つのクラブ活動からなりますが、それぞれのクラブにはキャプテンがいるんです。

永山：ルーカスさんも何かのキャプテンをやるんですか？

ルーカス：全部自分たちでやっていくと視野が狭くなってしまうので、それぞれのジャンルに強い人に声をかけて、キャプテンになってもらいました。そのキャプテンと一緒に旅の企画を考えています。この旅の一番の軸は自転車です。車という手段もありますけど、やっぱりまちの空気を直に吸いながら、自分の力で移動する方が、一番気持ちも入り込めると思うんです。自転車は、1日あれば40キロぐらいの移動は可能なので、いろんな風景を眺めながら人に会っていきます。また大切なのは、どの都市で行く『ツール・ド・ニッポン』にも、その土地に暮らす地元の協力者の存在です。東京にあるツール・ド・ニッポン事務局と各地の協力者とが、お互いに意見を持ち寄って、プロジェクトを作りあげていく。これをやってみて感じたのは小さなコミュニティの可能性。これからの時代、小さなコミュニティから新しい文化が生まれていく気がしています。

永山：それは私も感じています。今年、私は香川県豊島に横尾忠則さんの美術館、「豊島横尾館」を完成させました。このプロジェクトを通してアートをきっかけに高齢化した離島が活性化していく様子を目の当たりにしました。その事に刺激を受けて愛媛県宇和島市で以前リノベーションを手がけた木屋旅館を舞台に「AT ART UWAJIMA」というアートイベントを企画しました。さらに、アーケードの閉店した文具店をリノベーションしてギャラリーにし、2カ所に異なる様々なアーティストを呼んで1ヶ月間作品展示をしてもらったのですが、このプロジェクトを思い立ってから実行されるまで、約1年。なぜここまでスムーズに出来たのかというと、宇和島のコミュニティが小回りのきく小さくまとまったコミュニティであったことが大きいです。これが東京の場合、こんなにスムーズにはいかないと思います。

ルーカス：東京はコミュニティの規模が大きいですから。

永山：そうですね。そんな東京も、ルーカスさんの『ツール・ド・ニッポン』のように、“自転車が好きの人”のような、ひとり

arrived in America about a few hundred years ago. Elements of Japanese culture have developed over a lot longer than that, and there have to be reasons why they have survived to the present day. How are those of us living today supposed to make sense of these reasons and to understand the origins of such things? One of my roles as an editor, I think, is to suggest interpretations. We have to pass down the things that we believe are important. As you said, without culture, without nurturing culture, any kind of activity just turns into so much work.

Karoku: How long have you been in Japan, Lucas?

Badtke-Berkow: Japan is the first foreign country I ever visited. I fell in love with udon noodles (laughs) and never left. It's been twenty years.

Karoku: Yep, I'll bet it would have been hard to find a good bowl of udon in the United States twenty years ago. (Laughs) So how can we keep everyday activity from turning into work? Here's something I try to do. Instead of just thinking about making right decisions, I also try to make fun decisions. To find ways to have fun or to be amused by things that other people might think nothing of. To label as many everyday things as I can as something interesting. When people enjoy doing something, it becomes a game rather than work.

Nagayama: Speaking of behavior, I believe architecture is all about creating behavior and time. For example, when I renovated Kayaba Coffee I took down the old ceiling on the first floor and replaced it all with black, translucent glass that acts like a mirror, reflecting both the inside of the shop and the scenery outside. Imagine a customer drinking coffee at a table beneath the glass ceiling. Because the coffee is a black liquid, its surface reflects the scenery as if it were a movie. The customer might then look up and see how bright it is outside the window. There's something unique about the way time passes in a coffee shop. It's something very small that sparks a kind of self-reflection, but I really wanted the renovation to encourage this kind of phenomenon.

Karoku: I never would have imagined you'd think about details as small as the images reflected on the surface of a cup of coffee. Wow!

Nagayama: When you think about architecture, the kind of ideas that are inspired by what happens in the palm of your hand, like with a coffee cup, are really important. At the same time you also need to take a bird's eye view and consider what the building means within the context of Tokyo as a city. Maintaining a balance of both sensibilities is what produces architecture that fits the way people behave and go about their everyday lives.

The Key Word is “Human Scale”

Badtke-Berkow: Papersky, the magazine I work on, regularly holds an event called the Tour de Nippon. We started



SCAI THE BATHHOUSE

200年の歴史を持つ銭湯「柏湯」を改装し、1993年にオープンした現代美術ギャラリー。外観は趣のある瓦屋根の建物で中に入ると、コンクリートの床に白い壁面の清々しい空間が広がる。最先鋭の日本のアーティストを始め、海外の優れた作家を紹介している。
台東区谷中6-1-23 ☎03-3821-1144 営12時～18時（日月祝休廊）※展示替えの間は休廊

Since 1993, when it opened in a remodeled public bathhouse, the 200-year old Kashiwa-yu, this contemporary art gallery has showcased cutting-edge artists from Japan and overseas.

ひとりが「これが好き!」という強い想いを起点にした、行動力のある小さくて新しいコミュニティがたくさん増えて、そこからイベントや展示が作り出されていくとなると面白い。今の時代、マスへの憧れや可能性よりも、もっと細分化されたもの、自分のヒューマンスケールの中にあるものに対する信頼感が上がっていると思います。

花緑：そう言われてみると、落語は今の時代に合っているはずですよ。生ですし、それこそヒューマンスケールばっちり。**ルーカス**：そうですよ。すごく今のもの。

永山：本当にそうです。落語はコミュニケーションの在り方としてすごく今の時代に合っていると思います。

花緑：僕は最近、落語とはこういう言い方ができると思ったんです。「日本人とは、落語を聞かずに死んでいく生き物だ」と。この前、新聞記者の方に伺ったのですが、日本人の99%は落語を生で観たことがないそうです。だから落語＝日本の文化と言いながら、日本人はほとんど観ないものなんです。

ルーカス：僕が落語を見ていて面白いと思うのは、ひとりの人間がしゃべるだけで成立する芸能だということ。シンプルであるがゆえに、観る側も自分の想像力がすごく試されるじゃないですか。想像力を働かせないと、落語は面白くはない。

花緑：僕は、ルーカスさんのように落語を面白がってくれる人を増やしたい。今はまだ、落語の面白さが多くの人に知られていないと僕は思っているんですよ。なぜなら落語はステータスがなくておしゃれなものではないから。だからその状況を変えていかなくはいけない。そのひとつの試みとして、僕は洋服と椅子という現代スタイルで口演する「同時代落語」をやっているんです。そもそも落語が生まれた背景を考えると、落語ってつねに“同時代”にあった芸能なんです。

ルーカス：それはということですか？

花緑：落語は着物を着て、座布団に座って、長屋の話をします。これって江戸時代の人たちにとって当たり前のこと。自分たちも着物を着て長屋に住んでいたのですから。とすると、江戸時代に落語の定義がどうだったのか。それは“一人で座って面白いことを言う人”だったんですよ。だから今の時代、東京で落語をするならば、洋服を着て、椅子に座って、現代の話をします。これが同時代でしょうと。それを作家の藤井青銅さんが発見してくださって。それで僕は「これこそ落語の原点回帰だ」と思ったのです。この共通項さえあれば、スタイルは変わっていくものだ。僕は芸術や芸能とは、攻めていくことが守ることだとも思っているんです。それこそルーカスさんに興味を持ってもらえるような対象にならなきゃいけない。落語にアートを持ち込むことだってやってみたいですし、ワクワクすることをこちらからもどんどん発信していきたい。

永山：先ほどお話した「AT ART UWAJIMA」の舞台になった木屋旅館、2階床の一部、全部で3ヵ所を透明アクリル板に張り替えて、1階が透けて見える空間になっているのですが、表現者の方に、ここの場所を使って、何か発見してもらえたらすごく面白いなと思っているんです。花緑さんにここで落語をやっていただけたら、すごく面白い。1階のお客さんは見上げて花緑さんの落語を観ることに(笑)。

ルーカス：落語は身体表現でもあるから、いろんな角度から観られるのはすごく面白いですね。

花緑：下から観られるなんて初めての体験ですよ(笑)。僕は最近、未来をあまり確定しない方が面白いんじゃないかと思うようになりました。今日、お二方に出会えたことも僕の計算では成り立っていないですから。こういう出会いに恵まれて、そこから新しい広がりが生まれる。落語の可能性、そしてそれも日本の文化の可能性ですよ。

カヤバ珈琲
Kayaba Coffee

1916年築のカヤバ珈琲店は、1938年にオープンして以来、谷中のシンボルに。2006年に一旦閉店。2009年NPO法人たいとう歴史都市研究会が管理し、新しいオーナーとともに再出発。永山さんが改修設計を担当。昭和の面影を残しながら、今の時代の文脈で読み替えた空間づくりで人々に親しまれている。台東区谷中6-1-29 ☎03-3823-3545 営8時～23時(月～土)8時～18時(日)

Opened in 1938 in a storefront dating to 1916, Kayaba Coffee closed temporarily in 2006 before reopening in 2009 with a new owner under the management of the non-profit Taito Culture & Historical Society. Still retaining its Showa era style, this beloved space has been reimaged for a contemporary context.



永山祐子
Yuko Nagayama

1975年東京生まれ。2002年永山祐子建築設計設立。今年は横尾忠則の個人美術館、「豊島横尾館」の建築設計、愛媛県宇和島にある「木屋旅館」のリノベーションをきっかけに、宇和島をアートの力で活性化させるためのプロジェクト「AT ART UWAJIMA2013」を企画した。

Born in Tokyo in 1975, Nagayama founded Yuko Nagayama & Associates in 2002. This year, as a result of her work transforming a private residence into the Teshima Yokoo House, Yokoo Tadanori's personal museum, and her renovation of the Kiya Ryokan hotel in Uwajima in Ehime prefecture, she produced At Art Uwajima 2013, a project seeking to revitalize Uwajima through the power of art.

柳家花緑
KaroKu Yanagiya

1971年東京生まれ。古典落語はもとより、劇作家による新作落語や話題のニュースを洋服と椅子という現代スタイルで口演する「同時代落語」に取り組む。2012年からは47都道府県を題材とした新作落語を演じる「d 47落語会」を開始。ナビゲーターや俳優としても活躍。

Born in Tokyo in 1971, Yanagiya performs not only traditional rakugo but also new stories written by playwrights as well as his own dojdai rakugo. These "contemporary rakugo" address current events and are performed in Western clothes while seated on a chair. In 2012 he launched d 47 Rakugo, a series in which he performs stories about each of Japan's 47 prefectures.

ルーカス・B.B.
Lucas Badtke-Berkow

1971年アメリカ・ボルティモア生まれ。1993年来日。これまで主に「TOKION」「PAPER SKY」「mammoth」などの雑誌を手がける。また日本各地を自転車で巡る「ツール・ド・ニッポン」のイベント企画やプロデュースなど、雑誌以外のフィールドでもクリエイティブ活動を行う。

Born in Baltimore in the United States in 1971, Badtke-Berkow came to Japan in 1993. His work as a creative director has appeared in magazines such as Tokion, Paper Sky, and Mammoth. He is also engaged in creative activities outside the world of magazines such as planning and producing events like the Tour de Nippon, a series of bicycle tours in different parts of Japan.

the project because we wanted people to get out and travel in ways they could learn more about this country we live in. Tour de Nippon encompasses club activities in five genres—bicycles, mountains, books, food, and Japan—and each club has a captain.

Nagayama: Are you one of the captains?

Badtke-Berkow: If we tried to do them all in-house we'd end up running into the problem of limited perspective, so we have people from the outside who know each genre really well that serve as captains and help us plan each trip. It's also important to note that in every city where the Tour de Nippon takes place, we couldn't do it without local collaborators who live there. The Tour de Nippon office in Tokyo works closely with our collaborators in each city, bringing together ideas and building each project together. This has really given me a sense of the potential of small communities. In the future, I think, it is such small communities that are going to generate new culture.

Nagayama: You know, I feel very much the same. This year I designed the Teshima Yokoo House, And I was so inspired I decided to plan an art event called At Art Uwajima to be held at Kiya Ryokan, a hotel I had previously renovated in Ehime prefecture's Uwajima city. The project only took about a year between conception and execution. One of the main reasons things went so smoothly was because the Uwajima community is so tight-knit and quick-footed. I can't imagine it would have been as smooth if we'd been in Tokyo.

Badtke-Berkow: The scale of community in Tokyo is so much bigger, after all.

Nagayama: That's right. But Tokyo also allows the creation of powerful communities with specific interests, like the bicycle-lovers who are part of your Tour de Nippon. I don't think people today feel any great longing for, or see much potential in, the massive. I think more and more they're placing their trust in something more fine-grained, something that fits their own human scale, something they can properly understand.

Karoku: When you put it like, I can't help but think that rakugo is a good fit for the present day. It's performed live, and it's definitely human scale. No doubt about that.

Badtke-Berkow: Rakugo is very now! It's ability to be super simple while having so much impact makes it extremely modern.

Nagayama: I agree completely. As a method of communication, rakugo is right for the times.

Karoku: Recently I've been thinking you could practically define Japanese as people who will go to their graves without ever hearing rakugo. I learned from a newspaper reporter that 99% of Japanese have never seen rakugo performed live.

Badtke-Berkow: What I find fascinating about rakugo is that it is a form of performance achieved through nothing more than one person talking. This simplicity really tests the listener's imagination, doesn't it? Rakugo isn't any fun at all if you don't exercise your imagination.

Karoku: Personally, I'd love to see more and more people enjoy rakugo the way you do. I think many people just haven't caught on to how interesting rakugo is yet because it doesn't have much status and isn't particularly fashionable. So I set out to do something about it. One of the things I've done is perform dojdai rakugo (contemporary rakugo) dressed in Western clothes and sitting in a chair. When you think about the context in which rakugo was born, it's really always been a contemporary kind of performance. A rakugo performer wears a kimono and sits on a cushion, and tells stories about life in row houses. Well, what is it that defined rakugo in the Edo period? Someone sitting and telling interesting stories. So if you really wanted to do contemporary rakugo in Tokyo today, you'd need to wear Western clothes and sit in a chair and tell stories about today's world. The style can change as long as the common elements remain.

Nagayama: Kiya Ryokan it was the stage we just talk of "At Art Uwajima", I replaced part of the floor on the second floor with clear acrylic panels that show through to the first floor. Karoku, maybe you could perform rakugo there?

Badtke-Berkow: Rakugo is so physically expressive it might be really interesting to see a performance from different angles.

Karoku: Recently I've begun to think it might be better not to decide too much about my own future. Left to my own devices, for example, I never would have figured to meet the two of you. Yet this kind of fortuitous encounter generates new possibilities, not only for rakugo but also for the culture of Japan.



東京文化研究所の研究員の証は、このロゼット。花緑さん、ルーカスさん、永山さんにももちろん着用いただきました。お似合いです……！

研究結果のまとめ

大きなものから小さきものの時代へ。一方的な情報ではなく、ひとりひとりが日々の生活のなかで心に直撃したものにこそ、信頼を置ける時代に。それぞれの心が獲得した信頼の集積が、やがて小さなコミュニティとなって、新しい文化を形成していく。お三方の議論から導かれたひとつの答えが、ヒューマンスケールの時代だ。では自分は一体何に信頼を置くのか。そのためにはちゃんと自分の心でものを見て、人に出会い、感動し、時に批判もすること。新たな表現との出会いや初めてのまちでの発見は、そのきっかけになるだろう。ブンブロが主催する秋の芸術祭、『Tokyo Creative Weeks 2013』もまた、そのひとつ。ヒューマンスケール溢れる芸術祭に出かけ、その肌触りを確認したい。自分の心が獲得した小さな信頼は、未来もその都度更新する。